

令和六年度 『第七十六回 卒業証書授与式』 式辞

式辞

春の日差しにあたたかさを感じる今日の良き日に、晴れの卒業証書授与式を迎えた第七十六期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

そして、ご参列をいただきましたご家族の皆さん、卒業証書を受け取るお子さまの立派に成長された姿を見られ、さぞ嬉しく思われていることと存じます。十五年間の子どもたちへの精一杯の愛情が、ここに実を結び、義務教育を修了されたこと、心よりお祝い申しあげます。

また、卒業生のお祝いに早朝よりご臨席いただきましたご来賓の皆様方には、高いところからではございますが、厚くお礼申しあげます。

さて、卒業生の皆さんのが入学した令和四年度は、コロナウイルス感染症による制限はあったものの、北稜中学校の先生方の熱い思いで、すべての学校行事を工夫しながら実施してきました。思い起こせば、一年生の時の『自然体験学習』では、皆さんのお弁当が空飛ぶトンビから襲撃された事件から早いもので三年近い年月が流れようとしています。当時、まだ子どもっぽさの残る皆さんの写真などを見ると、この三年間での成長ぶりには驚かされるばかりです。

皆さんのが一年生の時の『合唱コンクール』は、コロナウイルス感染症の影響で、全校生徒が一堂に会して実施することはできず学年ごとの実施となりました。二年生となった時期には、コロナウイルス感染症は五類へ移行され、制限も緩やかになりましたが、今度は生徒数の増加で全学年一斉に実施することはできず、また、インフルエンザによる学級休業の影響もあり、一・二年生合同での『合唱コンクール』の実施となりました。当時の一年生(現二年生)も本当によく頑張りましたが、皆さんの学年の合唱が始まった瞬間に「度肝を抜かれた」といった表情をしていたことは、今でもとても印象に残っています。上級生が下級生に見本を示し、「各学級のまとまりを先輩として見せつけた」と言ってよいくらいの勢いがありました。その時には、すでに皆さんには自主性が育まれ、「どうしたらみんなが楽しく行事に取り組めるのか、学校生活を楽しく過ごせるのか」を自分たちで考えて行動してきた時期であったように思います。

修学旅行も本当に楽しく、思い出に残る行事のひとつとなりました。学年の先生方の楽しい思い出を作つてあげたいという熱い気持ちと、皆さんの精一杯楽しみたいという思いが重なり、一生忘れることのない修学旅行になったように思います。

修学旅行と言えば、2日目の夜は、皆さん本当によく眠れたことと思います。ある先生の怒鳴り声が聞こえ、皆さんは恐れおののき、そのまま眠ってしまったようですが、学校へ帰つてから、「実は、あれは、DJ 松岡の一人芝居であった」と聞かされ大笑いしたのも良き思い出となつたのではないかでしょうか。翌日に寝不足でしんどくならないようにという DJ 松岡の優しい思いからのこの作戦は、学校中でうわさもひろがり北稜中学校ではもう二度と使えないものとなりました。

昨日、配付された『卒業文集』には、『修学旅行』や『体育大会』・『文化祭』など、行事への思いがたくさん書かれており、私も懐かしく読ませていただきました。文集の中には、仲間や先生方への思いを綴った内容のものも多くありました。その内のひとつを紹介しておきます。「私は昔から人見知りで友だちができるかがとても心配だった。でも今は、嘘のように楽しい日々を送っている。それは同じ学年の仲間と先生方のおかげだ。失敗しても誰も責めることなく勇気づけてくれたり、他のクラスの仲間を応援したりと優しい雰囲気に包まれていたからだ。私を変えてくれたこの中学校にこれたのは奇跡だ。今は、北稜中学校で良かったと心からそう思っている。」と綴ってくれています。式典の最後に歌う『卒業の歌』の歌詞にあるような自分自身を支えてくれた友だちへの感謝の気持ちを記したものが多くありました。卒業後の進路先においても、お互いを理解し、支えあえる友だちと出会えることを心より願っています。

さて、先日の全校朝礼でもお話をしましたが、十四年前の三月十一日に二万二千人を超える犠牲者が出た『東日本大震災』が発生しました。皆さんもよく知っているように、地震大国の日本では、近い将来、高い確率で『南海トラフ巨大地震』が発生すると言われています。『防災・減災』のことを学ぶ中で、皆さんのような若い力が、今生活をしている地域社会にとって必要な人材であることは、『阪神淡路大震災』や『東日本大震災』、そして『能登半島地震』の教訓からも分かっています。自分自身のいのちを守ること、家族・友だち・地域の方々と助け合って、お互いのいのちを守っていくことが、地域社会で生きていくうえで最も大切なことであると感じています。

皆さんは、今まで中学校という小さな社会の中で生活をしてきましたが、義務教育を終えれば、一般社会の一員として生きていくことになります。そういう社会の中で、とても気の合う仲間と出会い、とても大好きな人ができ、何事も張り合うライバルがあらわれることと思います。その一方で、まったく馬の合わない、考え方の違う、自分にとって苦手な人との出会いも当然あります。中学校のような小さな社会でもそうであったように、人には人それぞれの考え方や思いがあることを理解しておく必要があります。それが違いを認め合うということだろうと考えます。『優しさ溢れる学校をめざして』が北稜中学校の学校教育目標ですが、お互いの違いを認め合いながら、それぞれの人の持つ良さや能力が十分に発揮できる社会を今後もめざして生きてほしいと願っています。

結びに、今日の良き日を迎えるまで、様々な心配をかけながらも、立派に育ててくれた家族の方々への感謝の気持ちを忘れず、また、たくさんの笑顔や思い出をくれた友だちや母校に思いを馳せながら、四月から始まる新しい未来に向かって歩んでくれることを北稜中学校教職員一同、心より願っています。「第七十六期生の皆さん、卒業おめでとう！」

令和七年三月十一四日
大阪市立北稜中学校長 山咲進一